

## 論文内容の要旨

報告番号	氏名	平位 暢康
Clinical characteristics and molecular epidemiology of invasive <i>Streptococcus agalactiae</i> infections between 2007 and 2016 in Nara, Japan  (和 訳) 奈良における侵襲性GBS感染症における臨床的特徴と分子疫学的特徴 (2007～2016年)		

### 論文内容の要旨

侵襲性 GBS 感染症は近年高齢者と新生児の間で増加傾向にあります。そのためよりよい抗菌薬治療と予防戦略のため GBS のサーベイランスが必要です。今回後方視的に奈良で 2007 年～2016 年の間に検出された侵襲性感染症の臨床的側面と、phenotype と genotype の多様性を評価した。臨床的情報に関しては病院のカルテを用いて後方視的に収集した。血液と髄液培養で検出された GBS の菌株について、capsular types, multi-locus sequence typing (MLST), antibiotic susceptibility, antibiotics resistance gene, と pulsed-field gel electrophoresis を解析した。

本研究では 40 菌株(子供 10 株・大人 30 株)が収集され、serotype と allelic profiles の分布について比較した。我々は出生時合併症を有する新生児における早期発症型侵襲性 GBS 感染症がこれまでの報告よりも高く、出生時合併症と早期発症疾患との間に関連性がある可能性を示唆した。標準的な抗生物質の予防戦略は、出生時の合併症を持つ患者では再考する必要があるかもしれない。成人では、患者の平均年齢は 68 歳(男性: 63%)であった。原発性菌血症が最も一般的な感染源であった。新生児では、早期発症者が 6 例、後期発症者が 4 例であった。最も多く同定された菌株は、小児では serotype Ia ST23 (40%)、serotype Ib ST10 (20%)、成人では serotype Ib ST10 (17%)、serotype VI ST1 (13%)、serotype V ST1 (13%) であった。レボフロキサシン耐性 serotype Ib 株と serotype V、VI ST1 は成人では共通の GBS 感染原因であったが、小児ではほとんど認められなかった。さらに、本研究の pulsed-field gel electrophoresis では、抗生物質耐性を有する傾向のある特異的なクローン分離株が 10 年前から水平方向に蔓延していたことが示された。今後も継続的なサーベイランスと分子疫学的な検討が必要であり、感染経路の特定と抗生物質治療戦略の改善が期待される。